

2023年11月26日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解Ⅱ 24 「実りある人生へ」

アモス9：13～15、ルカ6：43～45

問62 しかしなぜ、わたしたちの善い行いは、神の御前で義またはその一部にすらなることができないのですか。

答 なぜなら、神の裁きに耐えうる義とは、あらゆる点で完全であり、神の律法に全く一致するものでなければなりません。この世におけるわたしたちの最善の行いですら、ことごとく不完全であり、罪に汚れているからです。

問63 しかし、わたしたちの善い行いは、神がこの世と後の世でそれに報いてくださるというのに、それでも何の値打ちもないのですか。

答 その報酬は、功績によるのではなく、恵みによるのです。

信仰問答は、救いが人間の善い行いによるのではなく、神さまの恵みであることを強調します。特に今日の間答などは徹底して人間の行いを否定しています。そうすると心情的には、自分だって善い行いに励むことができると反論したくなるのです。そういう人間の思いが今日のところには代弁されています。信仰問答の背景には宗教改革がありますが、改革者たちが「信仰のみ」「恵みのみ」を強調したのに対して、ローマ・カトリック教会からは、それでは「無分別で放縱な人々を作る」(問64)という批判がありました。人間の業に関係なく神さまに救われるなら、悪いことをしたって構わないことになるのではないか。そんな恵みばかり言っているから人間は怠けるのだ。しかしこれはただカトリック側からの批判というだけではなくて、わたしたちの心の声でもあるのではないか。わたしたちも救いは恵みと言いながらも、どこかで自分の行いに期待するような、自分の行いを誇るような思いが湧いてくるのです。

日本のプロテスタント教会は、主にアメリカ経由で伝えられますが、その背景には当時の信仰復興運動の影響があります。信仰復興運動の一つの特徴として敬虔主義があります。例えば、禁酒禁煙などです。そういう風潮もあって品行方正といったクリスチャンのイメージが作られていきました。信仰者の敬虔は尊いことですが、一方で行為義認的な考え方を助長しました。わたしたちも家族や友人から「教会に行っているのに」とか「クリスチャンのくせに」と言われることがあるかもしれません。無意識の中にもそういう真面目さ、敬虔さを期待しているし、また期待されていることがあるのではないのでしょうか。だから「ねばならない」と頑張ってしまう。無理をして良い人を装う。それで疲れてしまうのです。

わたしたちを正しいとなさるのは神さまです。人間の行いではありません。わたしが何ができるとかできないとか関係ありません。神さまがご判断なさること。神さまが良しとされるなら良いのです。イスラエルの民も、イエスさまの弟子たちも、救いに相応しいかと言ったら決してそうではなかったでしょう。イスラエルは金の子牛を作り偶像礼拝をしました。弟子たちの中には疑い深いものも裏切り者まで入っています。けれどもこの相応しくないものをあえて神さまはお選びになられます。そこに恵みを現してくださるためです。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」(Ⅱコリント12：9)とパウロが言う通りです。わたしたちも同じです。わたしたちも恵みによって救われました。そして恵みによって救われた者は神さまを悲しませようとは決して思わないでしょう。それに甘えるのではなく、むしろ感謝に生きるようになるのです。それが本当のキリスト者の敬虔です。

問64 この教えは、無分別で放縦な人々を作るのではありませんか。

答 いいえ。なぜなら、まことの信仰によってキリストに接ぎ木された人々が、感謝の実を結ばないことなど、ありえないからです。

神さまの恵みを受けた者は、恵みに甘えて、無分別で放縦な生活をするのでしょうか。そうではなく、必ず感謝の実を結ぶと言います。なぜならその人はキリストに結ばれているからです。信仰問答では「キリストに接ぎ木された」と表現します。わたしたちは罪ゆえに悪い木でした。けれども洗礼を受けてイエスさまに結ばれ、良い木に接ぎ木されたのです。だから良い実を結ぶのは当然です。良い実、感謝の実の出所はわたしではなくイエスさまです。

最近、ある方から徳永規矩（のりかね）という人の自伝『逆境の恩寵』（新教出版2015年）という本をいただきました。徳永規矩は津奈木の人で、また徳富家にも関係があり徳富兄弟とは本当の兄弟のようにして育ったそうです。その関係もあって熊本洋学校へ入りますが、その後、単身東京に行き、横浜で宣教師バラの私塾に通うようになります。そこでキリスト教に触れて、当時の横浜住吉町教会、現在の横浜指路教会で宣教師ノックスによって洗礼を受けます。熊本に戻ってからは徳富蘇峰の大江義塾で教えますが、その後、熊本英学校を設立に尽力されそこで教えるようになりました。熊本英学校はのちに大江女子高等学校、フェイス女学院高等学校になります。しかし結核になり闘病の末、1903年43歳で亡くなりました。この本には、壮絶な病の苦しみ、貧しさの中で御言葉に支えられ、祈りに導かれていく姿が記されています。そして最後は「無限の感謝」という題の章で閉じられます。最後の祈りの言葉を一部ご紹介します。

「私はあなたに対しては声も出さず、言葉もありません。私はただ、沈黙によってあなたに語り、ただ心の中の涙で感謝を捧げます。あなたは必ずやこれを聞き、これを見てくださるでしょう。父よ。私こそは実にこの無限の恩寵をあなたから頂いた最も幸福な者の一人です。『我らは火の中、水の中を通ったが、あなたは我らを導き出して、豊かな所に置かれた』(詩編66:12) 長い年月、死の縄が私を縛り、黄泉の苦しみを味わい、艱難と憂いが私を囲み、一家はしばしば逃れることのできぬ災厄に陥り、もはや人力ではどうすることもできない悲惨の逆境に落ちぶれ果てたことが、いったい何度あったことでしょうか。しかしあなたは、これによって私を鍛錬し、今やまさに『義の平穏な実を結ぶ』ことを得させてくださいました・・・」

感謝の実を結ぶとは、そういうことではないでしょうか。この世で成功し、大成することが実りではありません。すべてを赦され、神さまの恵みで満たされること。わたしたちはそこに人生の実りを見えています。

天の父よ。この欠けだらけの人生にもあなたの恵みが注がれています。そのためにイエスさまが十字架で尊い命を注いでくださいました。その恵みでわたしたちの人生を満たしてください。どうぞこの救いを感謝し歩む者とさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。